

令和6年度 データサイエンス・AI リテラシー教育プログラム 自己点検・評価(大学版)

評価日時: 令和7年3月26日

開催場所: 武庫川女子大学中央図書館棟

目的: 令和6年度の「データリテラシー・AIの基礎(リテラシー教育プログラム)」の自己点検・評価

評価項目: 文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)」

自己点検・評価の視点	内容	点検・評価結果
学内からの視点		
プログラムの履修・修得状況	令和6年度は、前期に食物栄養学科の2年生210名、後期に食物栄養学科を除く12学部19学科の1年生2,068名が履修し、単位修得率は96.1%であった。「データリテラシー・AIの基礎」では、全15回の講義で確認テストを課し、LMS(Google Classroom)に蓄積されたデータから個々の学生の課題提出状況や理解度を週単位で把握し、理解度が十分ではない学生に対しては再テストを課した。また、出席状況に応じて「データサイエンス学習支援ルーム」から学生に連絡をとることに加え、各学科の共通教育委員・クラス担任との連携で当該学生の状況を把握し、継続的な履修を支援した。再履修生のうち、卒業学年の学生については必要に応じて面談を行い、単位修得に向けた支援を行った。	「データリテラシー・AIの基礎」は全学必修科目であり、単位修得率のさらなる向上が求められるが、今年度の単位修得率は昨年度より約2%増加した。成績評価方法の見直しとともに、個々の学生に対する履修支援が単位修得率の増加につながったと考えられる。今後も面談をする学生の対象を広げるなど、単位修得率の向上に向けて改善を図っていく必要がある。
学修成果	「データリテラシー・AIの基礎」では、毎回、授業内容の理解度、教材や課題の適切性についてアンケート調査を行った。また、学内の教務システムを利用した授業アンケートでは、オンデマンド授業で自分のペースで取り組むことができた点をメリットとして挙げた学生が多く、Excelを使った実践的な学びや、将来社会で生活するために必要となるAIやデータサイエンス領域の知識やスキルを学習できたことが成果として挙げられていた。	各種のアンケート結果より、概ね高い評価が得られているが、授業の復習をするための確認テストの返却方法に改善の余地があるため、来年度は学生の要望を踏まえた対応を期待する。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	前項に記載した毎回のアンケート調査において、授業の理解度は概ね7割前後の学生が「よく理解できた」、「だいたい理解できた」と回答している。しかし、各回の授業内容によって回答にばらつきがあり、特に「データ活用とは」および「2つのデータの関連性」に関する授業の理解度は低い傾向があった。また、課題の難易度は適切であるとの回答が大半であったが、確認テストの正答率が7割を下回った問題が令和5年度は全体の9.2%だったのに対し、令和6年度は13.0%と増えている。今年度は問題数が増えたことで一概に比較することはできないが、正答率の低かった問題に関してはその原因を探り、来年度の作問に反映していく必要がある。	授業内容の理解度については例年通りの評価が得られているが、各回の理解度にはばらつきがあるため、引き続き理解度の向上に向けて教材の改善を期待する。また、確認テストでは学習成果を測ることができる適切な問題作成に努めることが必要である。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	「データリテラシー・AIの基礎」は全学必修科目であるため、本学の入学者は全員受講することになる。したがって、後輩学生等への推奨度については確認していないが、本科目に関するホームページには、受講生の声を掲載し、科目の特徴や身に付いた知識・スキルをわかりやすく紹介している。また、令和7年度入学生の向けのキャンパスガイドでは、本プログラムの内容を紹介している。	今後もキャンパスガイドや受講ガイドにおける本プログラムの紹介内容を充実させることで、本プログラムの受講の目的・意義を伝えていく必要がある。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	令和3年度より、本プログラムの授業科目「データリテラシー・AIの基礎」は全学必修科目として開講しており、同年度以降の入学者はすべて本プログラムを履修している。	全学必修科目として4年目が終了し、概ね順調に推移しているが、今後は再履修学生の単位修得率を向上させる方策を検討する必要がある。
学外からの視点		
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	令和3年度より、本プログラムの授業科目「データリテラシー・AIの基礎」は全学必修科目として開講し、今年度末で初めてプログラム修了者が卒業する。今後、進路調査や企業等の評価を実施していく予定である。	卒業生は全員が修了者であることから、卒業時にアンケートを実施して、より具体的な修了者の声を取得するなど、多面的な評価を行っていく必要がある。そして、卒業生の進路については令和5年度以前と令和6年度卒業生の進路を比較し、変化があったかどうかの効果測定を行う必要がある。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	生成AIが想定以上のスピードで世の中に浸透している。また、データサイエンスを学ぶことができる大学が増えている現在において、産業界はどのような人材を必要としているのか、今後企業に対してアンケートやヒアリングを行い、授業内容に反映していく予定である。	産業界との連携は引き続き課題として残っている。令和7年度の共通教育カリキュラム改革における有識者会議の場などを活用して、産業界の要望を踏まえた教育プログラムとして発展させていくことが期待される。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	昨年度同様に後期の全学実施に向けて、前期の「初期演習Ⅰ」では本科目の概要を紹介する導入講義を実施し、本プログラム(科目)の目的や目標、データサイエンスやAIについて学ぶ意義の理解を促した。また、共通教育サイトの「専門分野の学びとデータサイエンス」では、学科の教員が専門分野と本科目で学ぶ内容とのつながりを説明しており、学生がより興味・関心を持ち、学ぶ意義が理解できるようにしている。	後期の授業に向けて前期の時点から、本科目の概要を紹介する導入講義を実施していることは評価できる。また共通教育サイトで学科の教員が専門分野との関連を述べているなど、学生が学ぶことの意義を理解できるように工夫されている。今後も多様な学部学科の学生が受講する上で、「学ぶことの意義」を伝え、学生の受講動機をさらに向上させる取り組みを実施することが期待される。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	一部の授業回において、理解度が低い傾向がみられるため、今後も「分かりやすい」授業をめざして改善を図っていく必要がある。また、確認テストの問題について精査を行うことで、授業の水準の維持・向上に努める。	全学必修科目であるため、授業の内容と水準の維持・向上は今後も大きな課題となる。オンデマンド授業であるため、基礎学力の面だけではなく、主体的に学習に取り組む姿勢が求められるため、各学科との連携をさらに強化しつつ、「データサイエンス学習支援ルーム」での面談で学生の状況を把握することが必要である。